

拡大世話人会に参加して

◇平成7年度第2回拡大世話人会に出席して（呑気者の印象）

富山大学 理学部

飯田 敏

平成8年3月15日16時から16日12時にかけて表記世話人会に参加しました。初めてこの種の会合に参加しましたが、良い知らせと悪いニュース両面で印象的なものでした。

世話人会に先立ち建設が急ピッチで進むSPring-8の見学会がありました。線型加速器は出来上がって調整中とのことでした。線型加速器はエネルギーのまだ低い最初の部分が難しいのだそうです。蓄積リングを1/4周ほど歩いて説明を聞きました。写真でしか見たことなかった、bending magnetや4極や6極の磁石がならべられ、真空テストも順次進められていました。ここから光が出るのか、フムフムなどと合点しながらの一寸した散歩でした。金色に輝くといわれるundulatorを見逃したのは残念でした。この日は天気も悪く、又時間もきつかったので周りの自然環境を楽しむ余裕は在りませんでした。（これは次回のお楽しみと云うことでしょうか。私は眺めの良いところでポケーとするのが好きなので、リングが取り巻いているお山の頂上に展望台でも在れば良いな—と思っています。リングの中で実験していると昼も夜も分からなくなりますが、そんな時見晴らしの良い展望台で鳥の声でも聞けば、良い気分転換になると思いますがかつろぎ過ぎでしょうか？）SPring-8の見学が終わり場所を姫路に移していよいよ世話人会の始まりです。石川さん、北村さんの明快な講演を聞いて元気が出ました。夜の懇親会ではこんな時にしか会わない人とダベって楽しく過ごしました。2日目は各サブグループからの準備の進行状況の報告が次々となされました。ハッチ内に収まる予定の測定機器の選定や発注が終わったとか、man powerは何人出せるとか、見物人が何時来ても準備OKだとか、最初の立ち上げの時にやるテスト実験は何だとか、云々（ここまでは大変結構でした。以下は我々X線トポグラフィのサブグループにとって喜んでばかりもいられないニュースでした）。X線トポグラフィのサブグループは先行ビームライン計画からは落ちはしたものの、その後の残り6本の相乗りビームラインの中には入っていたと思いきや、知らぬ間に取り残されていました。トポグラフィ関係のactivityはどこかに移るらしいと言うことだけで、報告会では一切触れられず、大変寂しい思いをしました。報告会終了後、参加していたトポグラフィ関係のサブグループメンバーは急遽会合を持ち今後の対応を検討しました。

サブグループの打ち合わせを終わって、外に出ると良い天気です。そのまま帰るのももったいないので野田幸男さんの薦めに従い名城白鷺城を見学して帰りました。これも結構でした（櫻の頃ならもっと良かったでしょう）。こんな気楽な事を云ってられるのも準備をしていただいた方々のおかげです。感謝しています。

◇拡大世話人会に参加して

岡山大学 理学部
浦川 啓

利用者懇談会から拡大世話人会の報告をするよう依頼されたのは3月末のことでした。元来、筆無精の性分が災いして期限ぎりぎり（5月末）になって書く羽目になってしまいました。拡大世話人会の記憶もかなりあやふやになってしまっています。そういうなかでも特に印象に残っていること、また、SPring-8の建設に向けて最近思うことを書きつづってみます。

3月の拡大世話人会は、年度末の旅費の消化（？）と播磨のSPring-8サイトの見学会が催されたこともあって、参加者が非常に多かったように思います（こう思うのは私だけで、本当はビームラインの建設がいよいよ始まることへの期待と意気込みの現れかもしれません）。会議は二日間にわたり、初日は菊田先生のながい挨拶（？）に始まり、上坪リーダーをはじめとする施設者側からJASRIの放射光研究所の将来構想、リニアック・シンクロ・ストレージリング建設の進捗状況と今後の予定（試運転等）や、挿入光源・輸送チャンネル・安全（放射線遮蔽や廃棄物について）・ユーティリティについての説明がなされました。ビーム使用料が成果公開を原則に無料となること、JASRIも研究所としての体裁を整えつつあることなど明るい話題もありましたが、未だに共同利用方式（特に文部省からの）が決まっていないなど来年の運用開始に向けて一抹の不安も残ります。そんなこんなの期待と不安のなかで夜の懇親会とその後も盛り上がっていたようで、翌日には眼鏡をなくして現れる人もいたぐらいでした。二日目は、おもに10本の共用ビームラインのエンドステーションの概要について、担当する各SGから報告がなされました。各ビームラインとも複数のSGの相乗りになっているため実験装置についてはかなり工夫されており、限られた予算の中で何とか多くのグループが実験できるように努力した跡が見られました。また、この報告の中でビームライン毎に実際の建設に参加するメンバーが発表されました。共同チーム側からの要請とはいえ、まだ、省庁間の壁が取り去れていない段階で建設グループの実働日数まで申告したユーザー側の熱意が感じられました。今年度は、いよいよビームラインの建設が行われます。特に私の関係するビームラインは偏光電磁石からの白色利用で輸送チャンネルになんら問題がないので、テストビームを使った予備の実験にも期待がふくらんでいます。しかしながら、相変わらず建設参加さえもオーソライズされていない現状を考えると心配がないわけでもありません。また、建設に関する情報は全面的に共同チーム側のビームライン担当者に頼らなければ入手できないことも問題です。担当者にしても大きな負担となっていると考えられます。工程表など（私が原研にいたときは毎月改訂版が出ていた）の情報は建設グループの責任者には配布されるなどの工夫があってもいいのではと思います。先発しているESRFとAPSに追いつき、SPring-8を軌道に乗せるためには、ユーザーと施設者側の尚一層の協力と努力が必要であることを感じています。

◇拡大世話人会に参加して

京都大学 工学研究科

河合 潤

3月15-16日の平成7年度第2回拡大世話人会に出席した。これに先立ち、SPring-8の施設見学にも参加した。ほぼ組み上がった線型加速器とリングを見学した。挿入光源は、調整中のため完成品の実物はまだ設置されていなかった。忙しい作業の合間に我々見学者への親切な説明をしていただいた方々に感謝する。

拡大世話人会では、上坪共同チームリーダーや北村・石川両氏による施設の現状報告が行われ、理研の加速器や高エネルギー研放射光実験施設での経験に基づき新しい加速器施設を立ちあげている研究者の自信を感じた。私のように大学に籍を置いて、日々の雑用にまぎれている身にとっては（講義は本務です、念のため）、大きなプロジェクトを実現しつつある共同チームをある意味でうらやましく感じている。共同利用ビームラインは早い所では来年9月完成とのこと。挿入光源は第1期は真空封止型アンジュレータをつくる計画と聞いた。フルパワーでは材質が溶けるので7 keV以上で押さえ気味に使うとのこと。我々ユーザーとしては、十分に信頼して共同チームにおまかせできるものと感じた。またユーザーに対する情報公開も十分なものと感じた。

安全性とユーティリティーについての笹本・鈴木両氏の報告では、研究支援・基盤面への予算が少ないのではないかという印象を持ちやや気になった。鈴木氏と私は、かつて理化学研究所基礎科学特別研究員として一緒に産経新聞の「大学を問う」というシリーズのインタビューを受け、同紙に掲載されたこともあるが、気のせいかな笹本・鈴木両氏とも激務で疲労も濃い様子に見えた。鈴木氏は液体窒素の供給体制に関し報告したが、最初からすべてのユーティリティーがそろっていることをユーザーとしては期待してはいないし、ある程度の不便は覚悟で、SPring-8ではじめてのビームタイムを期待を込めて待っている。化学実験室は当面作る予定は無く実験終了後の廃液は持ち帰りとのことであったが、将来的には化学・生物実験室の設置が認められることを希望している。

15日の夜には懇親会があり、理研からSPring-8へ引っ越した多くの研究者に出会えた。新着雑誌も姫路工大のキャンパスまで行かなければ読めないという様な雑談が印象に残っているが、そのような不自由な環境でもエネルギーギッシュにプロジェクトを推進している研究者に出会え、大変心強く感じた。

◇拡大世話人会に参加して

神戸大学 理学部
桜井 誠

平成8年3月15日および16日に姫路商工会議所においてSPring-8利用者懇談会拡大世話人会が開催されました。私は赤外サブグループのメンバーという名目で参加させて頂きました。残念ながら、我々の赤外ビームラインはI期計画には含まれていませんので、いよいよビームライン建設に入ろうという大方のサブグループの方々とは受け止め方が違ったかも知れませんが、以下に私なりの感想を述べさせていただきます。

姫路商工会議所での拡大世話人会に先だってSPring-8の見学会が行われました。さすがスマートに出来ていると感心しましたが、説明をされていた若い研究者が、自分の領域のごく狭い範囲しか理解していないように思えたのが気に懸かります。

拡大世話人会では、最初、バスの中で書いたという達筆のOHPで、菊田会長から挨拶(実験ステーション建設、共同利用体制に関する問題提起など)があり、続いて上坪リーダーからマシン建設の経過、今後の予定、および「放射光研究所」の概要が紹介されました。SPring-8の計画当初から危ぶまれた、省庁間の壁に由来する共同利用体制(旅費・研究費)の問題も徐々に解決されつつあるようで、関係各位のご努力には敬意を表します。1987年頃、学会会議での放射光将来計画の集会だったと記憶していますが、まだスタート前の”SPring-8”計画を危惧して、“理研タンDEM”の二の舞だけは絶対避けるべきだと強く主張されていた某先生の言葉が思い出されます。

石川氏らの話を聞くにつけ、SRビームライン光学素子開発のための基礎実験として、シリコンウエハーを素朴に治具で曲げて、ロッキングカーブを測定していた私の高良研時代(1977年)から考えると、ずいぶんX線光学素子技術も進歩したものだと思いますが、もっぱら熱問題と格闘されている現状を見ると同情の念を禁じ得ません。この点、北村グループの活動と対照的であると感じました。光を自らが如何に作り出すかという立場と、熱を如何に受け止めるかという立場、能動と受動の違いでしょうか。

主要メンバーの人間性に魅せられて、私は軟X線光化学サブグループにも属していますが、そこでは高分解能の軟X線分光器の開発が目玉になっています。光源を円偏光にするか直線偏光にするかも重要な要素で、この世話人会の後も数回サブグループの会合を開いて議論し、結局、高次光問題より物理(いや化学)を優先させ、直線偏光(8の字アンジュレータ)をとることに決断したところです。

核研SORを立ち上げた大先生の一人からよく伺うのは、「我々がSORを立ち上げた頃は、SORはまさに夢の光源であった(どんな新しい成果が得られるか想像もつかない)が、今となっては次世代リングといっても、現状の研究水準からの無限小の発展(類推)の接続で到達できる(想像がつく)」ということです。若い研究者の方々には、ぜひ独創的な発想で、特異点を見つけて頂きたいと思います。